2018 年 7-9 月

20180712
私は日頃、『国家学会雑誌』にきちんと目を通すことはあまりないのだが、このほど届いた第 131 巻第 5・6 号（2018 年 6 月）に、前田健太郎「政治学におけるジェンダーの主流化」という論文が載っているのに目を引かれた。政治学に限らず多くの分野でジェンダーに関する議論は一種の流行でもあり、その重要性を正面から否定する人は珍しいが、多くの場合、それは「ジェンダーを取りあげた章」だけに閉じ込められ、他の章ではほとんど取りあげられない――つまり「隔離」されている――ということがこの論文では指摘されている。そして、そうした隔離を超えてジェンダー観点を主流化する方途について考えるのがこの論考の狙いのようだ。
私は長いこと、「きちんと定式化することはできないけれど、多分こういうことではないか」といった感じのことを漠然と考えていたが、この論文はそれを学術的に定式化している。私は「非政治学的な政治学者」だと自認しているが、主流政治学のど真ん中からこうした問題提起が現われたことに感慨を覚える。

20180731
久しぶりのモスクワ。
昨日到着。入国手続きが大幅に簡素化され、あまり時間がかからなかったのには驚いた。今日は、レーニン図書館（正式にはロシア国立図書館だが、今でも旧称で呼ぶ人が多い）の本館に行って、閲覧証の期限更新をしてから、数点の本を注文した。本の検索・注文の電算化は数年前から進行していて、今回が初めてということではないが、システムの構築があまり分かりやすくない形になっていて、相当往生した（中には、文献名はコンピューター上に出てきても、その後の注文は画面上ではできず、そこに表示されている請求番号を手書きの用紙に書き込んで請求しなくてはならないというものもあり、もっと見つけにくいものもあった）。

20180801
資料探索顛末記。
ソ連官報といえば、ごくありふれた基本資料であり、日本のいくつかの図書館にも所蔵されているが、ときどき欠号がある。しかも、どういうわけか、同じ号があちこちの図書館で同様に欠号となっていることがあり、そうした号はロシアで見るしかない。私はこれまで何度かモスクワに来るたびにレーニン図書館の法令資料室でそうした号を閲覧して、日本では見られない法令類を読んだり、書き写したりしてきた。今回もそうするつもりだったが、ふと思いついて、普通の閲覧室（私の場合、第一）のコンピューター上で検索・請求できないかと考えて試してみたところ、うまくいかなかった。これは私が電算システムに慣れていないためだけではなくて、閲覧室の係員が手伝ってくれたのだが、彼女も探し当てることができなかった（天下のレーニン図書館にこんな基本資料がないはずはないのに、「これはわれわれのところにはない」と言い放った）。そこで、やはり法令資料室に

行くことにした（法令資料室の部屋が以前とは違う場所に移動していたり、廊下の途中が工事中で塞がっているために相当大回りしないと移動できないなどの不便もあったが、詳しくは省略）。この部屋には当然のことながら官報類は完備しているが、驚いたことに、私の探している号はここでも欠号だった。どういう事情かは分からないが、とにかく行方不明ということらしかった。がっくりと肩を落とした私を見て気の毒に思ったらしい係員が、長時間かけてあれこれと調べて、「ここになくても、基本書庫にあるはずだ」と言って、請求番号を紙に書いてくれた。閲覧室に戻り、その請求番号を手書きの紙片に書き写して提出したところ、係員は一目見て、「この番号はあり得ない。何かの間違いだから、コンサルタントに相談するように」との御託宣。そこでコンサルタントに事情を伝えたら、しばらくぶつくさ言った後、紙媒体のカードを繰って、さっきのとは違う番号を教えてくれた。半信半疑でその番号を手書きの用紙に書き込んで注文してみたところ、無事に出てきた。本来当然あるべきものが見つかったというだけの話なのだが、ここに至るまで相当悪戦苦闘したので、「ついに出てきたか」という感慨があった。後で考えてみたら、自分でカード・カタログを繰ってみるという手もあったのかもしれない。だが、以前は入ってすぐの一番目立つところにずらっと並んでいた膨大なカード目録が電算システム化に伴ってどこか別の場所に移動していたので、すぐは思いつかなかった（そういえば、日本の多くの図書館でも、かつては最も目立つ位置に置いてあったカード目録は、その座を端末機に奪われ、あまり目立たない位置に追いやられる傾向がある。普通の閲覧者はもっぱらコンピューターで検索するので、若い世代の人はカードに当たるということ自体をあまりよく知らないかもしれない）。
もちろん、レーニン図書館の大半の資料はこんなに見つけにくいわけではなく、たいていはすんなりと請求できて、簡単に見られるのだが、中にはこんなケースもあるという例。

20180804
レーニン図書館の話の続き。
本館正面玄関前の広場には、ドストエフスキーの大きな像がある。今でも「レーニン」の名をつけた旧称で呼ばれることの多い図書館とドストエフスキー像の取り合わせが面白く、私の気に入りの光景だ。本館の大きな建物の外壁には多数のレリーフがあり、下から見上げたのではあまりよく分からないが、全体として古代ギリシャに始まる古今東西の「知の巨人たち」が並んでいるみたいだ。この建物が正確にいつ建設されたのかは知らないが（帝政期の旧館は現在の本館の裏手の方にあるので、この本館はそれほど古くはないはず）、仮に帝政期の建設だとしても、ソヴェト政権がその模様を大幅に変えたりしなかったのは、「人類の知的遺産」のうちの進歩的なものすべてを受け継ぐのがマルクス＝レーニン主義だという発想を初期ソヴェト政権がいだいていたからではないか。
それはさておき、今日では、「人類の知的遺産」も「進歩思想」の伝統も、そしてもちろんマルクス＝レーニン主義も、すっかり影が薄くなっているが、そうした中で、あたかも図書館に背を向けるような形で新たにドストエフスキー像が建設されたのはどういう時代状況を象徴しているのだろうか。
古い建物であるだけに、各所にガタが来て、何度も大小の改修工事をやっており、その都度、かなりの不便を強いられるということを繰り返してきた。食堂が改修されたのは大分

前の話で、長い工事期間中は食堂がなくて困ったものだが、再オープンしてからは以前よりも味がよくなった（その代わり値段も上がった）ような気がする。昔に比べて面目を一新したのはトイレで、今では特に勇気を奮い起こさなくても平気で入ることができる（ピアニスト朴久玲のエッセイによれば、かつてはモスクワ音楽院の寮の女子トイレも筆舌に尽くしがたい様相を呈していたとか）。ここ数十年のロシアは大小取り混ぜていろんな変化を経験しており、そこにはよい面と困った面とが同居しているが、トイレがまともになったのは無条件で歓迎できる珍しい例だろう。

20180807
ここ数日は、ロシア公共歴史図書館で仕事をしている。
図書館に入る前に近隣の模様。図書館にすぐ隣り合うような位置にルター派の教会がある。そのこと自体は昔から知っていたが、昨年たまたま宗教改革 500 周年がらみのニュースに接したので（20171105 の書き込み）、今はどうなっているかに興味があった。行ってみると、確かに前よりきれいになったようではあるが、それほど大幅に面目を一新したという感じではない（一つには、ここ一帯の道路が盛んに工事中で、辺り全体が埃っぽい感じになっているせいもある）。この辺にはユダヤ教のシナゴーグもある。もちろん正教の教会も狭い範囲に複数ある。ということで、この界隈はちょっと面白い多宗教空間だ。
それはさておき、図書館の話。3 年前にここに来たときは大規模改修工事の真っ盛りで、中での仕事に大きな制約があって大変不便だった。今回は、大部分工事が完了しているものの、まだ完成一歩手前のようだ。一つには、かつてあった食堂が廃止になった代わりにビュフェができるということになっているようだが、まだ営業を開始していない。そのため、昼食をとるには、図書館利用証を入り口に預けて一時外出するしかない。もう一つ、中庭にあった歴史関係図書専門の売店は、規模は小さいものの、歴史書に特化しているだけに専門書の類をきちんとそろえていて大変重宝したものだが、これもまだ再開していない。ビュフェと図書売店が開いたら大分使いやすくくなるだろう。
この図書館はレーニン図書館に比べるとずっと規模が小さく、各種インフラも、大規模改修による改善にもかかわらず依然として見劣りする。その代わり、こじんまりとしている分、なんとなくアットホームな感じがあって、気持ちよく仕事ができる。

20180810
最近のモスクワ事情。
①都心のあちこちに、レンタサイクルを設置した場所がある。
②地下鉄の最新鋭車両のドアには、光を発する長い直線の装置があり、「今は安全に乗れますよ」というときは緑、「もうすぐ閉まるので無理に乗ろうとすると危ないですよ」というときは赤く光るようになっている。
③同じく最新鋭車両には、スマホなどを充電するための USB 差し込み口がついている。
④気温が 28 度を超えたときはいくつかの地下鉄駅で無料の飲用水を提供しているという掲示があった。そういうサービスをやっていること自体もさることながら、28 度という基準設定に驚いた。
⑤一時期全面禁輸対象だったグルジア・ワインが、今ではそこら辺のスーパーマーケット

に普通に並んでいる。グルジア料理の食堂も一時期激減したようだが、復活してきたようで、あちこちで見かける。このような面に関する限り、ロシア＝グルジア関係は一応の正常化に向かっているみたいだ（そういえば、今月は 2008 年のロシア＝グルジア戦争の 10 周年だ）。

20180812
ホテルのテレビを漫然と見ていたら、何種類もの討論番組があるのに気がついた。趣向は様々で、現代政治を取り上げるもの、ソ連時代の歴史認識に関わる論争、ガラッと変わって家庭内紛争（多くは子供をめぐる母親と父親の言い争い）、そして犯罪事件に関する模擬裁判風のものなど、とにかく何らかの論争問題について何人もの人たちがそれぞれに自己の立場を主張して言い争うといった感じ。断片的にしか見ていないので、番組の大枠についての理解もやや怪しいところがあるし、ほとんどの人たちがものすごい早口でしゃべりまくるので聞き取れない個所も多く、正確な内容を再現することはできない。ただとにかく、大勢の人がそれぞれ自分の正当性を主張して、口角泡を飛ばして論争しているさまは壮観だ。およそ「忖度」とは無縁の感じで、ひたすら自己主張する人が多い。ときおり出演者の中に、ペレストロイカ期に活躍していた顔なじみの知識人たちが混じっていることがある。30 年前よりもずいぶん歳をとった顔つきになっていて、歳月を感じさせるが、激しい口調で情熱的に論争するさまは昔を思い起こさせられた。
一昨日は、バルト三国とロシア・ソ連の関係に関わる歴史問題がとりあげられていた。異なる立場からの激論がぶつかり合って、なかなかの迫力だった。バルト三国からはラトヴィアの人が参加していて、上手なロシア語で堂々と自己主張していた。他方、イスラエルからの参加者が「エストニアやリトアニアで殺されたユダヤ人は、ほとんど全員がエストニア人、リトアニア人に殺されたのだ。ドイツはむしろそれを抑制しようとしたくらいだ」と猛烈な口調でまくし立てていた。バルト三国からラトヴィア人しか来ていないときにエストニアとリトアニアの責任を追及するのでは話が空回りの観があるが、とにかくこれは深刻きわまりない問題だ（歴史の問題としても、今日このような形で論争が行なわれることも）。

20180814
レーニン図書館のヒムキ分館。
ヒムキというのはモスクワの北の方にある近郊都市。この分館には、旧ソ連全国各地の地方新聞を網羅的に収蔵した新聞部と学位論文部とがある。私はソ連最後の時期を全国各地の状況を積み上げて総合的に描き出そう（いわば大量の各論を踏まえた総論）という妄念に取り憑かれてしまったため、この新聞部は長いこと、私の主要な仕事場であり続けてきた。
私が初めてモスクワを訪れたのはアンドロポフ期の 1983 年のことで、当時、ヒムキ市は外国人には開放されていなかった。といっても、（ここがソ連の統制の抜けたところだが）郊外行きのバスに乗れば、誰でもノーチェックで行くことができたから、物理的に行くことができなかったわけではない。ただ、レーニン図書館の制度として、外国人閲覧者がヒムキの資料を請求すると、その資料をトラックで都心の本館（正確には、その裏手にある

別館＝旧館）に運んでくれるので、わざわざ遠い郊外都市まで行かなくても、都心で資料が読めるという、一種の特権的サービスが提供されていた。それでも、ひょっとして現地まで行ったら、本館で請求できる以外の資料も見られはしないかという果敢無い期待を懐いて、バスに乗って行ってみたところ、図書館の入り口までは何の障害もなくたどりついたのだが、そこで入館証を提示したら、「あなたは外国人なんだから、こんな所まで来なくても、都心で資料を読めるでしょ」と言われて、追い返されてしまった。
それから数年後（正確にいつからだったかは覚えていない）、ヒムキ市も外国人に一般開放されるようになった――というか、資料をヒムキから都心までトラックで運んでくれるという特別サービスがなくなり、外国人閲覧者も自分でヒムキまで行かねばならなくなった。それ以来、私はモスクワに来るたびにヒムキに通い詰めてきた。ソ連を直接構成していた 15 共和国全部はもとより、いくつかの自治共和国・自治州その他の地域も含めて、あわせて 30 近い地域を研究対象として取り上げ、それぞれについて複数の新聞を読み比べるという作業を続けてきた。それまでのソ連と違って、ペレストロイカ期にはいろんな新聞が立場を異にした報道をするようになったから、そうした読み比べはいろんなことを教えてくれる。また、ある地域で起きたことが隣接地域で報道されることもあるので、特定地域の研究にはその地域の地元紙だけでなく関係各地の資料にも目を配る必要がある。ペレストロイカ末期になると、一部地域では新聞の刊行が途絶えたり、発送作業が渋滞するなどの現象も起き、そのこと自体が興味深い研究対象だが、とにかくヒムキでの所蔵にもときおり欠号が現われるようになった。そうした号については、他の図書館で補うためにあちこちを駆け回ることになる（驚くべきことに、モスクワの主要図書館のどこでも欠号である号が、日本の図書館で見つかるという例もあった）。そういうわけで、ここ二十数年間、私は「ヒムキ詣で」を重ねてきた。今回は、いつもと違って都心の図書館での作業を先にしてヒムキは後回しにしてきたが、やはりここに来ると「ああ、また来たな」という感覚に襲われる。
今回のモスクワ滞在は今日で作業を終え、明日帰路につく。限られた期間であり、それほど手広い調査ができたわけではないが、長いこと取り組んできた仕事の最終仕上げのための補充調査という目的のためにはそれなりの収穫があった。帰国後は、いよいよ最終仕上げの作業に全力を注がねばならない。

201801825
この前の日曜日（8 月 19 日）、誕生日よりはやや早めだが「古稀の祝い」というものを長女夫婦と次女夫婦が催してくれた。日頃ケチケチした生活を送っている私にしてはかなりの贅沢という気がして、「もったいない」とも思ったが、折角の好意なのでありがたく受けることにした。出てきた料理はどれも手のかかったもので、ありがたさを噛みしめながら、おいしくいただいた。私はあまりよい親ではなかったが、にもかかわらず二人の娘たちがともに一人前の社会人に育ち、それぞれに似合いの配偶者とめぐりあって、こうやってみんなして私の祝いの会を開いてくれるというのは、ただただありがたいことだと言うしかない。
70 歳という年齢は、若い人たちから見ると「紛れもない老人」というイメージだろうが（私自身、少し前までそう思っていた）、いざ自分がそうなってみると（厳密には、あと

もう数日だが)、複雑な心境になる。精神面では、気の若さとか精神の柔軟性といったものを保ち続け、若い人たちと対等の関係で語り合いたいと思い、実際そうできるのではないかと（主観的に）感じている。だが、若い人たちがそうした私の主観をどう受けとめてくれるのかは何とも言えない。健康面では、あちこちに小さな不調をかかえているものの、決定的に大きな病に見舞われているわけではなく、この調子でいけばまだ当分健康でいられそうだと思う。とはいえ、もともと強健でなかった体力がさらに低下しつつあることは蔽いがたい。心身あわせて、本格的に老けきったとはまだ思いたくないが、徐々に老けつつあることは認めないわけにはいかない。下り坂が急落にならないよう気をつけながら、なるべく緩やかな下降線を一歩一歩踏みしめて歩んでいくほかないだろう。幸い、長年取り組んできている著作のとりまとめ作業は順調に進んでおり、先日のモスクワ滞在で最後の補充調査も何とか完了したので、ラストスパートへと進むこととしたい。

20180913

大分以前から気になっていた森本あんり『反知性主義――アメリカが生んだ「熱病」の正体』（新潮社、2015 年）をようやく読んだ。

一読した印象は、アメリカという国、その社会、とりわけそこにおけるキリスト教の独自な性格に関する大変面白い解説というもの。具体例も豊富だし、難しい問題を扱っているわりには文体が軽妙で、読みやすい。最重要の主題はアメリカ的なキリスト教のあり方であり、書名に掲げられている「反知性主義」もその文脈で説明されている。このようなメリットがあるということだけで満足してもよいのだが、では、この本はアメリカの特殊性を知るという関心にしか応えないものなのかというと、話が微妙になる。

「反知性主義」という言葉は――この言葉自体が両義的であり、それをどのようなものととらえるかをめぐってもいろんな議論があるが――近年、日本を含む世界各地で話題になっている。本書を読んでいても、あちこちの個所で「これと似た現象は日本／ロシア／西欧にもある」と感じさせられたりすることがある。だが、それはあくまでも部分的な現象についての類似性であり、全体としては、むしろアメリカの特殊性が印象づけられる論の運びになっている。アメリカのキリスト教はヨーロッパのキリスト教とは違うし、ましてキリスト教が社会に根付いていない日本の状況とはまるで違うから、本書でいうような意味での「反知性主義」は他の国にはありそうにない、ということになる。実際、「あとがき」で著者は、日本で反知性主義を担うのはどんな人だろうかという問いを立てて、あれこれと候補を挙げているが、どうもあまりピッタリと当てはまる人はいそうにないといった議論になっている。それはそうかもしれないが、現に昨今の日本でも「反知性主義」が盛んに話題になっているのは周知のところである。ここから先の話を厳密に議論するには複雑な作業を要するだろうが、「アメリカ的な特殊性を背負った反知性主義」と、「近年、世界各地で問題となっている反知性主義」とが、どこでどの程度似ていて、どこがどのように違うのかを考える作業が必要なのだろう。

もう一つの問題は、いわば「反・知性主義」と「反知性・主義」の関係をどのように考えるかという点にあるのではないかという気がしてきた。前者は「知性主義」につきまといがちな独善性や倨傲を批判的に指摘する点で傾聴に値する面があるが、後者は「知性」の働きそのものを無にしてしまいかねない点で警戒すべきものだろう。とはいえ、前者と後

者が完全に無縁というわけではなく、往々にして前者が後者を随伴するというのが厄介な点なのかもしれない。そして、通常「知識人」と見なされている人たちが「反知性・主義」に反撥するあまり「反・知性主義」のうちの貴重な核まで洗い流してしまうのは、それ自体、「知識人」の立場を危うくしてしまうものではないかという気がする。
ここに書いたのは熟さない思いつきに過ぎない。できれば、多くの方々からの批判や提言を受けて更に考え続けていきたい。